

B 双胎をめぐる諸要因に関する研究

B-1. 母の属性と双胎との相関

単胎出生児約14,000例を対照群とし、双胎出生群100余例との間で、母の属性因子各項目について有意差検定(X^2 検定)を行った。

1 遺伝的因子

(1) 父母の年令

母の年令では、25歳~29歳群において若干高率を示し、19歳以下の若年層・35歳以上の高令層において低率であった。これは一般に先天異常児出生に関していわれていることと逆の傾向である。父の年令では、若年群ほど高率である傾向が認められた。いずれも統計的有意差は得られなかった。

(2) 父母の身長・体重

母の身長・体重においては一定の傾向は認められなかったが、父に於いて、身長が低いほど、また体重が重いほど高率である傾向がうかがわれた。しかし有意差をみるほどのものではなかった。

(3) 父母の血縁関係

統計的有意差は得られなかったが、血縁関係あり群の絶対数が少ないことは考慮せねばならない(双胎群では2例のみ)。

(4) 父母の血液型(ABO, Rh)

母B型群に若干、高率(有意差なし)であった以外、特記すべき傾向はなかった。またABO-Rh相関に於いても、特記すべき傾向はなかった。

(5) その他

母の最終学歴、初潮年令、月経の順・不順に関して、単胎群と差は認められなかった。月経痛(中でも下腹痛)群に於いては、高率であったが有意差は得られなかった。

2 環境因子

(1) 妊婦の状況

受胎調節、掻爬、レントゲン撮影、農薬使用、

化学薬品使用、動物飼育、輸血、経産等の有無については、いずれも単胎群との間に有意差はなかった。食生活、飲酒および喫煙についても、差はなかった。

妊娠前期の睡眠との相関では、睡眠不足群ほど高率である傾向が有意($p < 0.002$)に認められたが、妊娠前期の家事や乳幼児の世話の有無との相関はなかった。

(2) 仕事

仕事の有無による差はなかったが、職種差はみられた。自営群では低率であり、内職群では高率であった(有意差あり, $p < 0.02$)。中でも「工場・工業」群が有意($p < 0.02$)に高率であった。

職場の構造(階数など)・設備(エレベーター、冷暖房など)との相関に於いては有意差をみるものはなかった。

通勤時間、通勤方法、混雑状況、乗物内での状態との相関については、長時間徒歩群にて高率であった以外に、特記すべきものはなかった。

仕事の場所、状態、軽重、平均就業時間、休み時間との相関に於いても、事務の仕事かつ歩きまわる群に高率であった以外は特記すべきものはなかった。

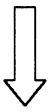
3 まとめ

双胎の成因に関する疫学的調査報告は皆無に近く、ポイントを定めようがないままに、得られたデータ群を単に統計的ふるいにかけただけの報告に終わってしまった。が、その過程で、父親因子、職種、歩行などの双胎出生への関与がうかがわれたことは興味深い。

(青山三男・鈴木忠義)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



3 まとめ

双胎の成因に関する疫学的調査報告は皆無に近く、ポイントを定めようがないままに、得られたデータ群を単に統計的ふるいにかけただけの報告に終わってしまった。が、その過程で、父親因子、職種、歩行などの双胎出生への関与がうかがわれたことは興味深い。